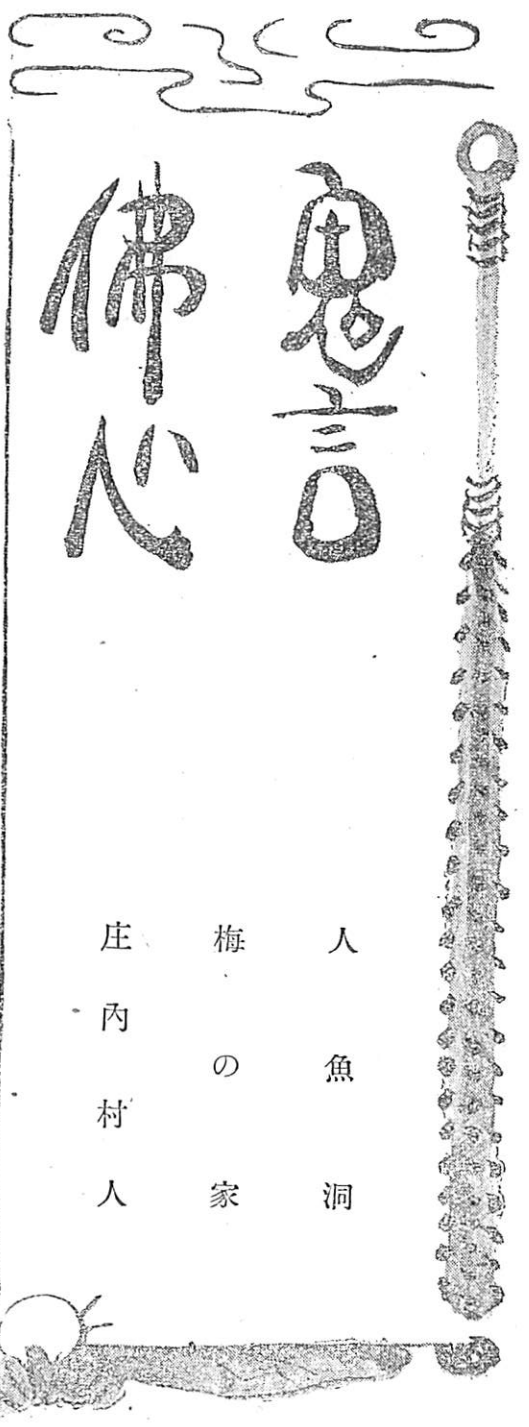


「あたゝゝゝ、誰も今日は逢はんと云ふて居るのに、私の部屋へ来たのは誰や」
 「へい私で御座ります、旦那高津の富が當りました」
 「ナニ、あたつたら宜へぢやないか、當つたら宜へぢやないか」
 「エ、ぢやないかぢや、御座りません、旦那」
 「エーイ、五月蠅い、是れぢやから、貧乏人は嫌いぢや、僅かの金が貰へるのが、其れ程嬉しいか」
 「イエ旦那、富が」
 「コレその様は何んぢや、人の枕元へ来るのに、下駄を履いて上つて来る奴が有るか」
 「マア旦那、相済まん事で、餘り嬉しいので、下駄をぬぐのを忘れて居りました、兎に角寝て居て貴ふては、何うもなりません、起きて、祝ひ酒を」
 と蒲團まくりますと、此の旦那も、雪駄を履いて寝て居ました」



鬼言
佛心

人 魚 洞
 梅 の 家
 庄 内 村 人

公演會所感

人 魚 洞

『上方はなし』を聴く會と云ふのを見に行つたこともなく、聴いたこともない私がどなたのであつた。

會員諸君もドシ／＼とつめかけてゐる、私の隣席のK老人が云ふにはアノ金屏風がテカ／＼と光つて落語家の顔が二つにも三つにも見えるので工合が悪いと云ふ、後ろの席の老人はアノ花瓶も平凡だし花もモツトドツシリしたものがありさうなものだと